

本匠村並びに宇目町探訪

中 村 由 子

(会員・弥生町江良)

三月十八日、弥生町歴史文会の一団二十五名は、本匠、

宇目の探訪に向う。「暑さ、寒さも彼岸まで」の諺のとおり好季節ではあり、ましてや郷土巡りとあって又一段と活気が車内に満ち溢れている。

いよいよ本匠村入り、当村の目玉である小半鐘乳洞はあの岩壁の下が入口と指差され、井の上部落では左岸川向うの前高神社、三竈江大明神について、会長の古藤田節がアナウンスされた。

大小無数のカーブを右に左に見事なハンドルさばき、道路は整備されているとはいえずがに山深い里。

井内部落の薬師如来堂に詣でる。霊験あらたかな如来様とあって一行は国家安泰、家内安全の大祈願守護札を受けた。

佐伯藩では、六代から十二代までの藩主が参拝された

由緒ある医王山長薬寺である。

今日の目玉商品である義民左右衛門の供養塔をたずね古藤田会長は概ね次のように説明した。

「佐伯藩災害記録」によると、宝永から文化年までの百五ヶ年間に、火災以外の大災害は二十四回発生している。ほぼ四年に一回、災害に見舞われていることになる。我が国の飢饉の回数、江戸時代において百参十回を数えた。特に享保、天明、天保の大飢饉は江戸時代の三大飢饉といわれている。又地震・津波・風水害・蝗の大発生による被害もしばしばであった。天災や、凶作があれれば百姓は忽ち飢餓におちいった。百姓には備蓄の余裕がないので、生活の悲惨さは言語に絶するものがあり、百姓こそ哀れであった。生死存亡の危機に立たされた百姓は「民窮して乱をなす」諺のとおり、百姓一揆をおこし

た。

文化九年（一八一二）正月のことである。因尾、横川、赤木、仁田原、上直見、下直見及び中野村の七ヶ村の百姓達四千人が長柄鎌、棒や鉄砲まで持った者もあつて鐘や法螺貝を吹き鳴らし、喊声をあげながら庄屋、お紙場役人、酒屋、炭山手代等の家を打ち壊したり、焼き打ちしながら簾山峠^{すだれ}をこえて切畑村江良の出納大庄屋の邸を打ち壊した。藩の一番家老戸倉織部は江良の洞明寺に於て、一揆側と願望十ヶ条について交渉して鎮定した。

この一揆の主謀者は上津川の杵右衛門、堂ノ間の文七ということだ。番匠川原で斬られた。六名の重罪者は深島に流刑に処せられ、九名の者は所替となった。その他この一揆に多少とも関係した者はそれぞれ処罰を受けた。

この杵右衛門の非業の死に対して、佐伯藩では多数にのぼる一揆衆の民心安定のためであろうか、杵右衛門の供養のためとしてこの地藏尊を刻んで建てたものである。多くの百姓の犠牲となつて、若くして散華した杵右衛門こそこの地方の生んだ義民であつた。

百姓一揆は、七ヶ村の殆ほ中心地である仁田原の正定寺に集落し、若き主謀者の指揮によつて行動したものと

思われる。

杵右衛門の供養地藏尊は、ここ上津川の里、小暗き杉林の中に一体ぼつんと建っている。木の間を洩るゝ光さえ見えない。その冷気の中で一層の哀れさが増す。

会員一同は地藏尊を中心に人垣をつくり、古藤田会長さんの熱心な説明に我を忘れて聞き入る。目頭が熱くなる。

この若き勇敢な主謀者の最後の姿に思いをはせた。

嚴重な警固役人達に守られ刑場に急ぐ、唐丸籠の中には、荒縄で縛られた覚悟の若者が「やるべき事はやった」という安心感と、我等の行動はいつの日か花咲き、稔る時が必ず来るだろう、と静かに目を閉じ微動だにしない若き日の義民杵右衛門の最後の姿に……。

十一時すぎ一行は千束の軸丸先生宅にお邪魔する。先生始め奥様方の温かいおもてなしに疲れも吹つとび、朝食をすまし軸丸先生の案内で木浦に向う。

山の深いのに驚く、その狭間に木浦部落がある。ここがテレビで紹介された「すみつけ祭Ⅱ山上り祭」の地木浦である。

慶長三年（一五九八）、木浦鉦山が再開されたが、其

後鉾山は栄枯盛衰を繰返し、その歴史と共に、すみつけ祭も伝えられたものである。

ここはバスで素通りし、更に奥へ、奥へとバスは山道を登って行く、道はお粗末だが新しく造成されている。

「ここは此の世の内だろうか」と呆然とした。車を降り道なき道を登る。坑口に一同勢揃い、軸丸先生の御説明



墓 郎 女

をお聞きする。

木浦鉾山は
岡藩直営の鉾
山として、鉾

山奉行を置き、
鋭意採掘に当
らせた。

慶長十二年
(一六〇七)

藩主中川久盛
は、木浦鉾山
の大量の鉛を
幕府に献上し
たということ

である。

天狗山、中山天神、浦谷、米山等の錫鉾の宝の山として有名だったという。坑口の両側には、いつの日の残雪か、点々と今なお残っていた。梅田清先生が、皆さんにすくって下さった。私も有難く頂戴して、その冷たさに生き返った心持だった。もう二度と、ここでこんな雪を口にするのではないだろう。感無量である。登る途中見落したが、ここ大切峠の九合目あたりに「千人間歩」と記した小さな立札があった。其の昔、ここには毎日二十人の坑夫が入坑していたと言われている。

今から三八〇年も昔、この奥山に銀鉾を発見し、優秀な機械、器具も全くない時代にどんな技術で天下に名を馳せたのであろうか。大切銀鉾山は、当時我国では四大銀山の一つとして名声を挙げていたという。

ここより西方を望めば、厳然とそび立つ祖母、傾山系国立公園が四囲を制している。その手前の少し低い山は、ここで採れた鉛を竹田に運ぶため、馬に乗せ、ひねもす続々越して行った山である。

岡藩士の記録によると、鉾山最盛期には木浦の人口は十万人、遊女町は、木浦に千軒、米原村に千軒と言われ

たそうだが、これはオーバーな言い方で、いかに隆盛を極めたかということを表現したものであろう。

昔日の名残りとして長門町、竹田町、上町、金具町、梅木町等の町名が残っているという。然し、繁栄の蔭には幾多の悲話もあつたであらう。長い年月の間には、必ず順調な歩みだけとは思えない。悪役人のため強制連行された老若男女は使役され、女子は女郎にされ、僅かな粗食を与え、連日の重労働と過労、栄養失調で次々と死に追いやつたかも知れない。

また天神山雑木林の中には、小石数個で円形をつくり、墓の代りとしている。この代墓が十七ヶ所あつたが、まだまだ数の多いことだろう。恵まれない家庭の事情や、経済面で遊女に身を落し、荒くれ男や、悪役人にもて遊ばれ、非業な最後をとげたら若い女郎のことを思うと哀れである。夜毎、肩を寄せあい、すゝり泣く声が聞えてくるようだ。天神山女郎墓に、安らかに眠って下さいと祈りながら下山した。

岡藩は深田氏を、寛永十一年（一六三四）宇目郷惣支配に任じ、義弟忠左衛門をその副役に任じた。

岡藩は万治二年（一六五九）に宇目村を小野市組、重

岡組に分け、小野市組千石庄屋に、深田氏を、重岡組千石庄屋を渡部氏とした。渡部氏を下爪十二ヶ村の年貢割当役として割元に任じて、深田氏の下に所属させたのである。さして権勢を誇った代官屋敷も今では名のみ跡地と化している。広い土地には数々の石造物が往時を偲ばすだけである。一メートル余りの石造角柱に「代官屋敷跡」と刻まれていて、わずかに道行く人の目をひくさびしさである。

次に、崇円寺をたずねた。

境内には立派な宝篋印塔が建てられている。深田代官墓地は裏山にあり、私達の見た範囲では権勢の下向期の末期に近い墓ではなからうか。苔むして一般人の昔墓と変りはない。現在では申う人としてなく、時折り訪れる心ある方々によって草木は切り払われているようだ。

藩政時代権勢を誇った役人の末路も哀れであり、一場の夢に過ぎない。

最後に、重岡キリシタン墓をたずね探訪を終った。軸丸さん、会長さん、皆さん有難うございました。